チェロを通して夢・発見・ドラマ。NPO International Cello Ensemble Society（ICES）bulletin

December.2011

CELLISSIMO

「東日本大震災復興支援 小規模チェロアンサンブルコンサート」を実施！

Vol. 17

野外でのコンサートとなったスーパー・マイヤ「滝の里」店。店先の一角を借り、駐車場スペースに椅子を出してのコンサートとなりました。ご当地の「北国の春」で涙ぐみながら一緒に歌ってくださる姿が心に残りました

CELLISSIMO GRANDIOSO

2011年11月27日（日）～28日（月）の2日間、6ヵ所の訪問演奏と1回のチャリティコンサートを実施しました。被災地の中で400kmを移動する強行軍でしたが、天気にも恵まれ、チェロを通してできることをあらためて体感した2日間となりました。

「東日本大震災復興支援 小規模チェロアンサンブルコンサート」について思うこと

松本 巧（神戸市）

本会報誌には参加者皆様からいろいろな感想が載せられていますので、私は開催の経緯やお骨折りくださった方々について記したいと思います。

4月20日

串乃家から茨城県以北の「1000人のチェロ」参加者全員の方々に水・電池などの援助物資をお届けしました。その中のお一人、仙台の高橋明さんから「ぜひ1000チェロを仙台でと夢見て、それを目指して練習に励んでいます」との御礼メールを拝受しました。

事務局は今後のために仙台市内での「1000人のチェロ・コンサート」開催が可能な施設の情報を高橋さんに求めました。以後、高橋さんと頻繁にやり取りをし始めました。

7月10日前後

南村潤（なむら）さんが串乃家に来店され、「東北に復興支援チェロ・カルテットで行きたい」とのご提案がありました。

8月24日

高橋さんが仕事で空路神戸に来られました。ランチをご一緒しながら復興アンサンブルの意見交換をしました。高橋さんは、個人ですでに仲間の演奏者（ヴァイオリン、フルート、ピアノなど）とともに、仙台市内、陸前高田、女川、石巻、気仙沼、山形などでアンサンブルのボランティアコンサートを実施していて、現地の状況をとてもよく把握しておられました。高橋さんから「現地の人々は一人でも多くの方々に来ていただきたいのです。みんな待ってます」との言葉をいただき、松本は阪神大震災の時と重ね合わせて1000人はすぐには無理なので取りあえず少人数で、南村さんのご提案を少し膨らませての規模での復興アンサンブルを思いました。

8月30日

南村さん、高橋さんたちと日程のすり合わせを進め、11月27日（日）、28日（月）に実施を仮決定しました。

10月28日

ICES臨時理事会を開催し、正式にNPO全会員に呼びかけて参加者を募ることに決定。（8月30日から10月28日の間、2ヵ月を要したのは理事会の日程調整のためでした）

11月2日

全会員に復興アンサンブル参加への案内を郵送しました。

11月15日

全参加者15名とボランティアで畑井

7万本あった高田松原のたった1本残った「奇跡の一本松」。樹齢270年、徳川8代将軍吉宗の頃の生まれと言われたこの松ですが、残念ながら12月中旬、枯死していることが発表されました。しかし、一本松の松ぼっくりの種子から18本の苗が育ちつつあります。命が受け継がれていること、思いがつながっていることが、その凛とした姿とともに忘れられません

貴晶さん、友人の桜井史人さんの参加が決定。

11月27日

午前11時にJR仙台駅「ステンドグラス」前に集合し、復興アンサンブルはスタートしました。

以上が復興アンサンブル誕生の経緯です。

●

「1000人のチェロ・コンサート」に何度も参加してくださっている宝塚のプロチェリストの南村さんと同じく、仙台からの参加者で脳神経外科医（東北大教授）の高橋さんの篤志から、復興アンサンブルは誕生しました。特に高橋さんは仙台にお住まいながら陸前高田、気仙沼などの状況を病院・大学その他のネットワークを駆使して情報を入手してくださいました。

NPO幹部が現地に事前に行くことなく、これだけのイベントを開催できたのも高橋さんの思いと行動によるものでした。

最初、南村さんたちのカルテットだけで行こうとしていたのをNPO事業に格上げしてくださったのは、畑井さんの提案によるものでした。畑井さんをご存じない方もおられると思いますが、「第1回1000人のチェロ・コンサート」の基本コンセプトから参加者募集要項（20ページにおよぶ）の作成をしてくださり、コンサート本番では初めての「1000人のチェロ」の舞台作りから進行まですべてにわたって力を貸してくださった方です。その後の第2回、第4回にわたり、その手腕を発揮してくださいました。「1000人のチェロ」の真価を認め、社会的に良い方向に導いてくださる貴重な方です。今回は会社の同僚の桜井さんをバンの運転手としてお連れくださり、丸2日間、運転手、会場準備、買い出し、その他雑事を一手になさってくださいました。そんな畑井さんと桜井さんには心から感謝申し上げます。

それから忘れてならないのは、昨夏より事務局を引き受けてくださった藤代庄司さんの事務作業です。11月2日の発送、集計、参加照会への対応、コピーなど大変な作業量をこなしていただきました。

さらに呉のプロチェリスト、乗本幸さんは、広島での「第4回1000人のチェロ・コンサート」で格別のご尽力をくださった方で、南村さんとともに今回の我々のアンサンブルが何とか人に聴いていただけるのに多大な貢献をしてくださいました。本当にありがとうございました。

そして最後になりましたが、理事の田原さん。2日間で7回ものコンサートが会場・聴衆の違いなどで演奏曲目が違いました。それを克服するためにすべての曲にコンサートを4つに分類した演奏順まで記入したカラー付箋を付けてくださいました。あのおかげで、限られた時間内で予定通りの曲目をみんな間違わずに弾くことができました。参加者の方々が口をそろえて親切な楽譜を喜んでいました。さらに27日は参加できないのに、夕刻のチャリティコンサートの案内文字や募金箱まで夜を徹して作ってくださいました。おかげで募金額も32、300円と多額を記録できました。（全額を陸前高田の一本松を守る会に寄付しました）

●

演奏者構成を記録しておきます。西から乗本幸さん（呉市）、南村潤さん（宝塚）、鈴木孝道さん（枚方）、高木佐智子さん（堺）、田原光子さん、新巳喜男さん（川崎）、藤代庄司さん（横浜）、森加代さん（武蔵野）、岡山ひかりさん、三留舞さん（都内）、角谷輝彦さん（新潟）、高橋明さん（仙台）、高橋好子さん（北上）、山崎篤さん（盛岡）、神戸の松本を入れて以上15名でした。そして、演奏を運転とステマネの裏方で支えてくださった畑井さん、桜井さん。皆さん、貴重な時間と費用をご負担して参加してくださり、ありがとうございました。心から感謝と御礼を申し上げます。

また、今回の7回にわたるアンサンブルに地元メディアもたくさん取材してくださいました。河北新報、毎日新聞、宮城テレビ、仙台放送、NHK宮城…。それらの取材の中で「次はいつ東北で1000人のチェロ・コンサートをなさるのですか?」という質問を多数いただきました。

「1000人のチェロ・コンサート」は1995年1月の阪神・淡路大震災の犠牲者への鎮魂と復興支援を目的に生まれました。それが被災地の人々にもたらした勇気付けの大いなる力となったことは、高円宮憲仁親王殿下をはじめ、多くのメディアや有識者、そして見に来ていただいた方々の喝采によって、証したてられました。

私たちは、すぐにでも第5回目の「1000人のチェロ」を東北で行ない、多くの人々が東北を訪れ、東北を思い、被災地の方々の力強い復興への勇気付けをしたいと思っています。

しかしながら、被災地が広範囲に及ぶため、いくつかの小ユニットがキャラバンをしていく形も検討せねばなりませんし、また費用面での課題もあります。

それらすべてをクリアしていかねばなりません。全国の会員諸兄・チェリストの皆様の心意気こそが、それらを解決していく非常に大きな原動力になるものと確信しています。

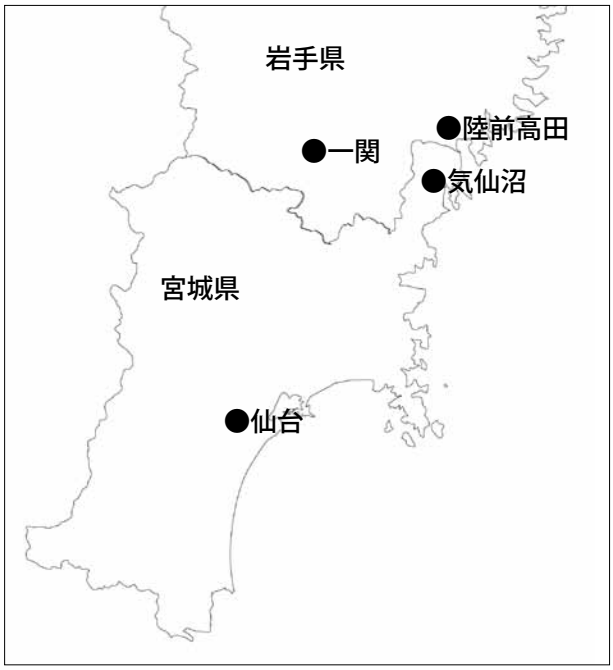
東日本大震災復興支援小規模チェロアンサンブルコンサートをお世話して

高橋明（仙台市）

私は、2009年11月から一念発起してチェロを始めました。すぐに「1000人のチェロ・コンサート」の情報がネットから入ってきました。周りからは無謀と言われましたが、だめもとで事務局に問い合わせたところ、初心者用のパート13があるので、練習参加の条件を満たせば出演可能との返事。そして広島での「第4回1000人のチェロ・コンサート」（2010年5月16日）に参加がかないました。まったくの

東日本大震災復興支援
小規模チェロアンサンブルコンサート実施会場

- **11月27日（日）仙台市内→一関**
  - 13:30 宮城野区福田町南仮設住宅集会所
  - 15:00 若林区日辺仮設住宅クラブハウス
  - 18:00 エルパーク仙台6Fスタジオホール（チャリティコンサート）
- **11月28日（月）一関→陸前高田→気仙沼**
  - 11:00 マイヤ「滝の里」店
  - 13:15 介護老人保健施設 松原苑
  - 14:30 東部デイサービスセンター
  - 16:15 気仙沼市立病院外来待合ホール



エアチェロでしたが、音のうねりの中に身を置いて、同じ音楽を奏でているという感激を堪能させていただきました。

私の記録では、今回のイベントに関連する最初のきっかけは、松本理事長から、3・11震災に対するお見舞いをいただいたことで、4月20日にメールでお礼を申し上げました。その時に、「いつか仙台で1000人のチェロ・コンサートをやりたい」という夢を書いたのです。それに対して、理事長から仙台に「箱」があるかと尋ねられました。そこで小生なりの提案をいたしました。いつかこのやり取りが現実になれば素敵だと思います。その後、メールのやりとり、8月24日の神戸での直接のお話などを経て、今回のイベントの具体的な話になりました。直接お話しした時点で、すでに被災地でのアンサンブル・ボランティアコンサートを始めていました（気仙沼市立病院「ともに歩むコンサート」8月19日）。以後、「1000チェロ」のイベントを念頭において、各地でのボランティアコンサートを夏休み以後行なってきました。その結果、再度具体的な話が提起された10月始めには、ほぼイベントスケジュールの骨格はできていたという状態でした。あとは、思いつきでチャリティコンサートを追加、仙台市内の仮設住宅集会所の交渉を行なったくらいです。これはネット上での情報収集が大変役に立ちました。

★苦労した点

① 陸前高田の演奏場所が最後まで確定せず。以前に伺った時は、保育所が思いのほか感動的で、ぜひと思ったのですが、当日に地域の保育所全体の行事が入っていて駄目。学校は日常生活を取り戻すという位置づけで一時的に受け入れをしていない状態。ということで、介護老人保健施設2ヵ所に、屋外という提案が、SAVE TAKATAから行なわれました。屋外は寒くなってきている時だし、風や雨の影響があれば、即中止というリスクが大きいため、かなり抵抗がありました。しかし、地域の方々が来られる場所ということで、テントを用意いただいて、万が一の場合はキャンセルも考えるということで妥協。結果としてはとても素晴らしい機会になりました。（日頃の行ないがよいせいで、もう少しでポツリポツリと来そうな雰囲気でしたが、何とか天気がもってくれました）

② 同じく高田で、最初に予定していた施設が、インフルエンザと、職員の削減のため、駄目と言われました。他のところも同様の問題を抱えていそうで、なかなか交渉が進まず、このままでは高田で3ヵ所予定、実施1ヵ所か、というところまで行きました。しかし、これも前回アンサンブルで訪問していたもう1ヵ所の施設が受け入れてくれて、ことなきを得ました。

③ 仙台の仮設住宅集会所などは、最初予定していたところが他の行事との兼ね合いで、できなくなるなどのハプニングがありましたが、代わりの集会所を手配くださり、これも問題なく完了しました。

④ 一番状況を読めなかったのが、実はチャリティコンサートでした。公共施設ですが、日曜日の夜ということで、どのように宣伝するか悩んでいました。理事長の「投げ込み」の一言で、チラシを記者クラブ3ヵ所にいれ、マスコミへの浸透を図りました。結果的に南村先生のバッハ無伴奏組曲第2番全曲演奏という目玉も効いて、当方の予想を遙かに上回るお客様に来ていただき、また、チャリティの収益も32300円と望外の成功となりました。計画を立てた者の特権として、二つ得したことがありました。一つはMCをさせてもらったこと。3・11以後の自分の思いというのは、思いの他たまっていたようで、お聞きになる方には少々、冗長だったようですが（現に高田の最後の施設では、「ご託を並べてないで、ちゃっちゃと演奏しろ！」というありがたい叱責もいただきました）、思いっきりしゃべることができました。三枝さんのレクイエムの紹介では何と涙が出てきてお見苦しかったと思いますが、そのような次第ですのでお許しください。また後半は気仙沼を除いて、「唄を皆で歌いましょう」というスタンスで臨んだので、やはり歌う人が必要だろうと勝手に解釈し、チェロ・アンサンブルをバックに演歌を歌うという普段経験できない、快適な経験をすることができました。この場を借りて感謝申し上げます。また、すべての参加の皆様が、被災地でのイベントの意義と限界、制限などを深く理解いただいて、迅速で丁寧な行動をいただけたことも、イベント成功に大いに寄与したと考えています。ありがとうございました。

当初の目的だった、①被災地を訪問し、

宮城野区の仮設住宅での演奏会からスタート。ご挨拶しているのが高橋明さん

少しでも励ます、②その活動を通じて演奏者も元気をもらう、③「1000チェロ」のプロモーションを行なう、という3つのことは大体達成されたと思います。今後も3・11以前の状態に復旧し、さらに東北らしい発展を遂げるまで、なるべく支援を続けていただければ幸いです。2回目、3回目のイベントも計画されることと思います。今回の経験を生かして、さらに充実したイベントとなるよう工夫してまいりたいと存じます。ありがとうございました。

補足：以下の点について編集部よりコメントを求められましたので追加します。

★被災地の中から陸前高田を選んだ理由

今回の震災の特徴は、地震そのものより、津波被害が甚大だったこと。その典型は仙台平野でそれは、本来なら1日目に蒲生（がもう）とか閖上（ゆりあげ）とかに行けば良く理解されたことと思います。時間がなくて残念でした。もう一つの典型が三陸沿岸で、明治三陸津波など多くの伝承が残っています。「津波てんでんこ」（津波が来たらてんでんばらばらに逃げなさいという意味）という言葉も三陸の言い伝えです。そして三陸で最も被害の大きかったのが、陸前高田でした。さらに後から述べる高田の松原を数十年前に訪問しており、その光景が一変したことが信じられない、「ぜひここには行かねば」というのがもう一つの動機です。高田の後に気仙沼に行っていますが、気仙沼にも同様の理由があります。さらに余裕があれば、岩手なら大槌、大船渡、釜石、宮城なら女川（原発も）、南三陸町（志津川）にも連れて行きたかったです。次回に期待ですね。

気仙沼市立病院外来待合ホールでの演奏が今回の最終でした。翌朝のNHK「おはよう日本」のローカル枠「おはよう宮城」と午後の全国枠でも放送されました。涙ぐまれたロビーの聴衆を映し出し、入院されている方が「どの曲も癒しになりました」とおっしゃっていました

★SAVE TAKATAとの関係作り

ネット上で陸前高田の出身者で作られたボランティアの窓口を懸命にされている様子を見て、一緒にやりたいと思ったのが一番の理由です。まだ現地事務所の方々にはお会いできていなかったのですが、今回、スーパー・マイヤで若い高田の方とお会いでき、嬉しかったです。10月29日（土）に、ボランティアを加えて（東京からFacebook経由で呼びかけに応じてくれたプロを含む4名）、10名で訪問した時に、訪問先を選定、先方との交渉を引き受けていただきました。完全におんぶにだっこの状態でした。それがうまく機能したので、今回も陸前高田の演奏先との交渉はお任せできました。

★今回皆で着用したTシャツのこと

「だいじょぶ！　とうほく」というサイトを立ち上げ、知り合いにデザインして貰って、ほそぼそとネット販売で収益金を「高田松原を守る会」に寄付してきました。まったく私個人での応援グッズです。最初は白地のフリーMというサイズだけでしたが、今は日本文、英文、白地に黒地、S・M・L・XLのサイズバリエーションも揃っています。すべて地元の業者に依頼しており、やや割高ですが、質には自信があります。受注生産ですが、ずっと続けていこうと思っています。震災後に否定的な報道ばかりの時に、7万本の松原でたった1本生き残ったこの松は希望の灯火に見えました。たとえこの松が倒れたとしてもその精神はずっと生き続け、松原の復活、東北の復活につながっていくと信じています。

国際チェロアンサンブル協会 東北支援コンサートに参加して

三留舞（都内）

まず最初に参加された皆様、運営手配のお手伝いしていただいた方々、そして演奏を聴きに来てくださった皆様、本当にありがとうございました。

私は今回が初めての参加ということで、どのような方々がどのような形で運営されているのかも良く分からないままにとりあえず飛び込んだ形となりました。でも、皆様が温かく迎えてくださり、非常に充実した時間を過ごすことができました。初めて会ったその日から本番演奏ではありましたが、それでもアンサンブルとして成立する皆様の団結力と技量はとても素敵だと思いました。（私はといえば、賃貸で練習時間がとれず、ほぼ初見で皆様の足をひっぱりまくり…ホントすみません）

3月の震災後に、何かしたい、自分にできることは何だろう、と考えていたときにふと「1000人チェロ」のことを思い出し、検索を掛けてHPを発見。問い合わせをしましたところ、理事長の松本さんから快いお返事をいただき、さっそく会員に登録させていただきました。

それから大きく間をおかずに思いがけず今回のような被災地に音楽を届けることができる機会をいただき、参加させていただくことができて嬉しく思います。自分一人ではできないことも、集まれば大きな力になるのだということを思い知らされました。声を上げてくださった高橋さんの勇気と行動力に感謝です。

実は、詳細が届くまで規模については知らなかったのですが、逆に少人数だったことで聴いてくださる方々の近くまで行き、泣いたり笑ったり揺れたりしてくださる姿を見ながら、一緒に歌って演奏することができたのが嬉しかったです。

また、あんなに近くで一本松を見ることができたことも良い経験になりました。被災地の光景は、何度TVで見てもあまりにも衝撃的過ぎて、映画のようにしか感じられない部分があったのですが、この目で見て、この足で被災地に立つことで、実際にあった現実をしっかりと受け止め、そしてその現実へ音楽を届けることができたように思います。叶うならば、あそこで「鳥の歌」を弾きたいくらいでした。

あの時、湧き上がった思いを忘れずに、これからも東北が立ち直っていく姿を自分ができる形で応援していきたいです。

改めてこの機会を実現していただいた皆様に感謝申し上げるとともに、私の拙い演奏に耳栓もせずに付き合ってくださいました皆様（特に3パートの方々）に深く感謝します。

ありがたいです、大きな楽器でここまで来てくれて。

また、出発前の疑問点、わがままを散々聞いてくださった事務局の方々、運営や運転をしてくださった皆様にも御礼を申し上げます。

追伸：またこのような機会がありましたらぜひ参加させていただきたいです。もちろん、その時はしっかり練習していく所存です！　久しぶりにチェロを弾き、指先がすっかり水膨れになってしまいましたが、弾いてるときはその痛みを忘れるくらい楽しかったです。やっぱりチェロが好きです。今回の演奏を通して改めて気づかせて貰いました。ありがとうございました！

演奏旅行中の奇病

藤代庄司（横浜市）

仙台での3ヵ所の演奏がすんだ翌日、宿泊場所の一関から車で最初の演奏場所、陸前高田へ向かう。案内標識が、陸前高田に入ったことを示していた。長い坂道を下っているときにフロントガラスの先に見えた光景…絶句…あったはずの街がない。それでも、今日の第1回目の演奏会場、流失地域の中に仮店舗で営業を開始した地元のスーパー「マイヤ」の駐車場に到着、雨が降れば即中止の野外演奏。アスファルトの上に楽器を横たえ、演奏準備に。

背もたれもないベンチを並べただけの客席には待ちかねたように、買い物のお客様や、わざわざ聴きに来られたお客様が思い思いに座って。

松本理事長の、阪神淡路大震災の時は自らも肋骨2本を折る怪我をし、店も長いこと営業できなくなってしまった被災者であり、今回の東日本大震災で被災された皆様方のことを片時も忘れたことはない、との挨拶に、聴きに来られた方々は大きく頷いて、一気に親近感の漂う空気に包まれる。

演奏は進み、アンコールには、この町の出身者、歌手千昌夫さんの大ヒット曲「北国の春」。演奏しながら、見てきた光景を思い起こしつつ、この方々はどんな思いでお聴きになっているのか…ふと客席に目をやると、体を左右に揺らしながら演奏に合わせて唄っておられたご婦人が、目頭を押さえている。

特別の許可を得て、高田松原の「奇跡の一本松」の地を訪問し、目に焼き付けてきました

この瞬間、何がなんだか分からないま突然涙腺が緩んで譜面が霞んでしまい、暗譜していないし、どうしよう…とうろたえる始末だった。この瞬間の感情は、未だ以って解析不能でござる。

次の会場では、客席を見るからいけないんだ、と自分に言い聞かせ、客席を見ず必死に譜面だけ睨んで、でも、やっぱり客席が気になる、「一寸だけよ」とばかり客席をチラ見した途端、また涙腺が緩む、そして最後の演奏会場まで、すべて同じ症状。

最後の演奏会場は気仙沼市立病院、ここで診ていただく訳にはまいりませぬ、我慢した。そして帰宅してからも、この曲のあるフレーズに来ると、思い出したように涙腺が緩む。

この演奏旅行中の奇病、自己診断で「涙腺制御不能症候群」と名づけた。

被災地の状況は、片付きつつあるとはいえ、まだ3月11日のまま時間が止まっているように見えるのは自分一人だけだろうか。自分自身、震度6弱の揺れに遭遇、一部損壊の被災証明書をいただいている身で被災地を思う時、がんばってください、という言葉は要らない、いや掛けられない、と強く感じている。散々がんばって、やっとここまで辿り着いたのだと思うから…。

「がんばって」という言葉がどれだけ残酷なのか、自身の体験で言えば、マラソンの40キロ付近で、がんばれ！と声を掛けられても、40キロ精根尽き果てるまで走りに走ってきて、まだがんばれ、と言われる辛さは並のものではありませぬ。たかが42・195キロのマラソンでさえそうなのだから、これだけの大惨事に遭遇して8ヵ月半、がんばってきた方々には、どうしてもがんばれとは言えるものではござらぬ。

「皆様のことは決して忘れない、忘れません、またまいります、と言いたい！」それを理事長や、仙台の高橋さんがマイクを握って伝えてくれた。

私のような、へぼチェロ弾きでも、できることがある、との思いを強くした身震いするような2日間だった。

全国のICES会員の皆様方と、復興途上の東北で「1000人のチェロ」に参加できることを願いつつ、奇病（？）の治療に専念することといたそう。

「心安らぐひと時」を感じてもらえたら

乗本幸（呉市）

2011年3月11日。その日、私は千葉の今川にいました。そして一人車中で、赤信号停車中に激しい揺れを体感しながら生命の危機を感じました。その瞬間から、紆余曲折いろいろな体験をしましたが、今現在こうして生きていることに日々、感謝させていただいております。

「チェロ」という楽器を通して、被災者の方々が少しでも、「心安らぐひと時」を感じてもらえたらいいな…という気持ちで一生懸命演奏させていただきました。

急な短期間の募集でしたが、参加させていただけたことに感謝申し上げます。

演奏曲目　フランス民謡、むすんでひらいて、かすみか雲か（スズキ・メソードチェロ指導曲集より）・組曲第３番（フンク）・セレナーデ op.29 よりアンダンテ（ラッヒナー）・チェロのためのレクイエム（三枝成彰）・パッサカリア（ヘンデル=ハルヴォルセン）・カンタータ「モスクワ」よりアリオーソ（チャイコフスキー）・レリジオーソ（ゴルターマン）・ふるさと（岡野貞一）・北国の春（遠藤実）・見上げてごらん夜の星を（いずみたく）・浜辺の歌（成田為三）

チェロが言葉にできない気持ちを伝え合った

髙木佐智子（堺市）

ＪＲ大阪駅のみどりの窓口で、気仙沼まで新幹線と在来線で行くことができるかどうかを尋ねてみたものの、結局、思い切って行くことができなかったのはゴールデンウィークのことでした。その後、そのままになってしまっていたので、今回の復興支援コンサートを知り、参加させていただきました。まさか今年中に訪れることができるとは思っていなかったし、それも大好きなチェロで訪れる機会を与えていただいたことを心から感謝しております。

松本さんが各会場で「チェロのためのレクイエム」演奏に際し、話された言葉を、今回のコンサートの意義を考えながら拝聴しました。…まだまだ大人数でおじゃまするには早すぎるけれど、神戸の震災の経験から、私たちはみなさんのことを忘れていないということを伝えたくて、まずは少人数でおじゃましました、また必ず、次はもっとたくさんのチェロ仲間と一緒に来ます…。

聴いてくださった方々からは、「チェロばかりなんてすごい」「チェロの音を実際に聴くのは初めて」「生演奏～!!」など、とにかく喜んでくださる声をいろいろいただきました。「奇跡の一本松」を見下ろす高台の施設では、聴いてくださった方々の席のすぐ横の通路で楽器を片づけている時も、みんな座ったままその様子を見ていてくださって、まるで〝大きな楽器を持って来るのも大変なのにありがとう〟と言われているかのような温かい空気を記憶しています。そしていよいよ楽器をかついで出る時には、すぐ近くのおじいさんが「来てくれてありがとう」と輝く目でおっしゃってくださいました。ここでは最前列のおばあさんが最初から涙ぐんでいらして、この方々の３・11からの日々に思いをはせながら演奏し、「ふるさと」は歌いながら弾きました。

それから今回新たに考えたこと。それは「北国の春」を弾いて思ったことです。いやチェロは演歌もいけるな、と（前からうすうす感じていたけど）実感したことは、さておき、チェロは誰のために弾くのかな、ということです。あんなに「北国の春」を元気に歌ってくださるなんて。「北国の春」は高田の曲だ、と教えていただきましたが、とにかくあの時、あのおばあちゃんたちにとっては、どんな素晴らしいクラシックより、「北国の春」が嬉しいのです。今回は、私たちが届けたい曲、みなさんが聴きたい曲、どちらの気持ちも伝わりあって、思い出したり感じたり元気になったり。音楽が言葉にできない気持ちを伝え合いました。

私は病み上がりだったのであまり無理をしないで演奏しようといくら思っていても、「パッサカリア」の途中から必ず必死になり、「北国の春」で張り切ってフィナーレ、の繰り返し。そのたびに腕が重くヨレヨレになっていったのですが、そんな私でも安心して演奏に集中することができたのは、仙台で集合して解散するまでの、現地での７ヵ所での演奏、食事、宿泊などすべて計画、準備いただき、私はチェロを持って参加するだけでよかったからです。もし自分であのような活動をしたいと思っても、それだけのつながりや準備のための時間など、とても実現できません。本当にＮＰＯ国際チェロアンサンブル協会のおかげです。次にもっとたくさんのチェロ仲間と一緒に行った時には、またその準備段階でも、何かできることがあればお手伝いさせていただきたいと思っております。全国のチェロの仲間の方々と一緒に、東日本復興支援の演奏をする日を楽しみにしております。

東日本大震災復興支援小規模チェロアンサンブルコンサートに参加して

森加代（武蔵野市）

今回の小規模チェロアンサンブルコンサートに参加させていただき、２日間被災地を訪れることが叶いました。

願ってもない企画に、すぐに申し込みをしたものの、短い準備期間と伴わない実力とで、実際には直前まで少し臆していました。しかしながら、当日演奏会が始まると、聴きにいらしてくださった方々の暖かい拍手や曲にあわせての力強い歌声に、こちらが大きな力をいただいて、素晴らしい時間を共有することができたと実感しています。

演奏会への参加をお許しくださいましたＩＣＥＳ事務局、企画立案からツアー全般をお世話くださいました高橋明様、チャリティコンサートにて心に深く響くバッハをお聴かせくださいました南村潤先生、直前まで仕事に追われて本当に拙い演奏の私を共演させてくださったすべての参加者の皆様、演奏会を聴きにいらしてくださったすべての皆様に心より厚く御礼申し上げます。

被災地の困難は決して東北だけのものではありません。同じ日本人として首都圏に暮らす私自身も、北陸や広島にルーツを持っています。今回参加させていただいて、東北をとても身近に感じることができました。被災地に暮らされる皆様とともに祈り続けたいと、あらためて切望いたしております。

松原苑では、こんなに多くの皆様に聴いていただき、歌っていただきました

東日本大震災支援チェロ・アンサンブルコンサートに参加して

鈴木孝道（枚方市）

心痛：被災状況を現地で見るにつけ、大震災当時の壮絶なドラマが甦り、胸が震えました。

感動：被災者が演奏を聴かれる姿が忘れられません。瞼を閉じて「レクイエム」の演奏を聴き、やがてそっと目頭を押さえる姿。チェロの名曲に心癒すような表情の方々。童謡、唱歌で幼き日々を想い、老いの身で力いっぱい歌っておられる姿。

満足：夜のチャリティコンサートは、ベルリン・フィルの12人に匹敵するＩＣＥＳの15人のアンサンブル。バッハの無伴奏組曲第2番のソロなど、みごとな演奏に大満足でした。

意欲：仙台市から夜の東北自動車道を一

チェロ、それは魂の交感

世話人　畑井貴晶

楽器別性格診断なるものによれば、チェロ奏者は包容力とバランス感覚にすぐれた、ゆらぎのない人間性の持ち主だそうである。明るく解放的ともいわれる。なんだかほめすぎのようだが、私はこの会に携わるようになって、他の楽器の診断はいざ知らず、ことチェリストに関してはそうとう当たっているのではないかと思うようになった。

わがNPOの理事でありスズキ・メソードの寺田さんに聞いてみたら、子供たちにも習う楽器による個性の違いは確かにあるといわれ、教室の生徒たちが合宿などで移動する際、迷子になりがちなのは決まってピアノとヴァイオリンの子で、それを探しにいくしっかりものはたいがいチェロの子だったりするとおっしゃっていた。

チェロは中低音域に属する楽器であろうから、高音から低音までのバランスを見ている。それだからそういう包容力や人を世話するような力が自然と育つのかもしれず、あるいはもともとそういった性質を持つ人がチェロを選ぶのかもしれず、この鶏と卵は実はどっちでもよい。とにもかくにも、チェリストとはそういう個性の持ち主であり、「1000人のチェロ」とはその個性が1000個も集まって、一つの方向へと聴衆を導く甚大なる規模の催しなのである。

クラシック音楽に詳しい人間はよく「なんでチェロばっかりなんだ？」と聞いてくるが、私はこの東北行であらためて、チェロばっかりが正しいのだと確信した。どういう曲であろうと必ずその音色は優しい。すぅっと誘う。奏でる人と聴く人とを自然に繋ぎあげ、アンサンブルとしての完成度とは別に（それはこの際問うまい：笑）、あくまで天衣無縫である。ここにたとえばヴァイオリンやヴィオラがいて弦楽四重奏であったとしたらどうかと想像してみると、わかる。高音のものがあるとその演奏は作品化する。ピアノ三重奏にいたっては、聴くものそっちのけでヴァイオリンとピアノが競い合ってしまう。そういう作品化するとはステージと観客を隔てることである。聴かせるものと聴くものに分ける。そういう作品の献上というのもまた鎮魂のあり方かもしれないが、よそよそしさは否めない。

翻ってチェロアンサンブルは、被災して傷ついた人々に対し語りかけコミュニケーションをするようである。人間の声と同じ音域であることで、それが成立する。そしてもう一つ忘れてならないことは、冒頭に記したチェロを嗜む人の個性である。包容力とバランス感覚にすぐれ、明るく解放的で、ゆらぎのない人間性。これらが観客と強い絆を作っていく。これを奇跡と呼ばずになんと呼ぶべきであろうか。

15年前、松本理事長と私は第1回の「1000人のチェロ・コンサート」に向けて企画書や参加者募集要項を書いていた。松本さんが何度も、チェロは人間の楽器、チェロでなければ、チェロだけでなければ、震災で傷ついた人の鎮魂と復興への祈りはできないんだと繰り返していたことを思い出す。松本さんは正しかった。

「東日本大震災復興支援小規模チェロアンサンブルコンサート」の全部で7つのステージは、それぞれに被災の程度や現在の環境が激しく違っていたが、そのどの会場のアンサンブルにおいても、勇気を与えに行った側とそれをもらう側とのあいだに確かな交感があった。私はそれを目撃できた。道中、はじめてのことだらけでプレッシャーもあったし、スケジュールも超人仕様のものだったが、私はチェロを通じた魂の交感を目撃できたことで、来た甲斐があった、おつりまで出たと正直思ったのであった。

この東北行に参加した15人のチェリストに心から敬意を表し、感謝したい。

鈴木孝道さんからはスケッチも届きました

関市へまっしぐら。翌日はさらに陸前高田市。そして気仙沼の演奏会場へと一泊二日のツアーはまさに強行軍。チェロの積み降ろし、ステージの椅子並べなど、手打ちのツアーコンサートにエネルギッシュな姿は圧巻でした。

美味：みごとな演奏で目的達成の喜びは、仙台の「牛タン定食」、気仙沼「ゆう寿司」の味で乾杯。旅の疲れも忘れました。

感謝：今回の事業に企画立案・事務作業に従事してくださった方々、遠路を無事故で運んでくださった方々、現地でお世話くださった方々に心から御礼申し上げます。そして我が身の健康と入院中の妻にも感謝。

ライフワークにしたい

南村潤（宝塚市）

今回の慰問コンサートに御尽力くださった松本さん、高橋さん、そして演奏会を裏からサポートされた畑井さん、桜井さんに御礼申し上げます。

私は今回の3・11の時自宅にいまして、テレビで津波を観ていました。あまりの惨状にショックを受けて、同時に私に何ができるのかをずっと考えていました。

そして漠然といつか慰問コンサートをしたいと思うようになり、夏に松本さんと会う機会があり、その時に私の気持ちを松本さんに話しましたら、松本さんも賛同くださり「ぜひ実現させましょう」と言われ、今回のコンサートに繋がりました。

実際に行ってみて、テレビで観るより被害が酷い現実に言葉が出ませんでした。その中で、被災された方々がものすごく元気なのにびっくりしましたが、「レクイエム」と「ふるさと」を弾いているうちに、すすり泣く声が聞こえ、そして何人かの方とは演奏後に被害状況などを聞かせていただきましたが、しかし私はあまりのことに何も声をかけることができませんでした。チャリティコンサートでは無伴奏を弾くチャンスまでいただき感謝しています。

今回実際に行ってみて、完全復興までにはかなりの時間が必要だと思いました。でも、もし私たちのチェロでほんの少しの時間でもリラックスしていただけるなら、慰問コンサートを行なうことをこれからの私のライフワークにできればと思います。

初日夜の仙台市内でのチャリティコンサートには、しっかり正装して臨みました。おかげさまで32,300円のお志をいただくことができ、高田松原再生のために寄付させていただきました。コンサートマスターを務めた南村潤さんによる無伴奏ソロも心に染み入る演奏でした

information board
掲示板

2012年2月4日（土）東京で新年度の総会を行ないます。

下記のとおり総会を行ないます。皆さまお忙しいとは思いますが、1年に一度の大事な会合ですので、万象お繰り合わせの上、ご参加いただけたら幸いです。

なお、大変お手数ですが、人数確定のため同封のハガキを、新年1月20日（金）までにお送りください。

2012年2月4日（土）アルカディア市ヶ谷
13:30 ～ 14:30 総会
14:30 ～ 16:30 アンサンブル
17:00 ～　　懇親会

議題
① 2011年度決算承認について
② 2012年度予算と事業計画承認について
③今後の理事会体制について
④東北復興支援に伴う演奏会企画

総会後は、アンサンブルで楽しみたいと思います。東北に行ったときに、あまり練習できなかったので、こういう機会にぜひいろいろな曲を弾いて合わせてみましょう。

懇親会は、総会会場近くのお店を予定しています。会費は4,000円～5,000円くらいになります。

退院されたヴァインスハイマーさんのご自宅を12月14日にお訪ねし、皆様からの折り鶴をお届けしてきました。

Weinsheimer氏は12月5日の友人との会食中に倒れ、救急車で運ばれ、集中治療室で一時生命の危険が危ぶまれました。なんとか一命は取り留め、1週間後には退院されご自宅で静養されていました。原因は十二指腸あたりにできた良性のこぶし大の腫瘍で、1/3の血液が失われていました。そんなW氏のお見舞いに「千羽鶴」のアイデアを思い、皆様にお願いしたわけです。10日朝の関空出発に合わせ、大阪チェロアンサンブル・ミルの15名の皆様が練習後に255羽の折り鶴を折ってくださり、同メンバーの共田さんが9日夕刻にNPO神戸事務局までわざわざ届けてくださいました。これで僕の渡独時に少なくとも皆さんからの折り鶴をお届けできることになりました。この分は14日にお届けしました（上の写真）。W氏は大変な喜びようで、僕にチェロのデュエットをしようと言い、30分ほどその折り鶴を前に二人でチェロデュエットを楽しみました。次の分は12日の午後にEMSでベルリンに到着し、全国から16名、約1,000羽以上のW氏の回復を願うお気持ちをお届けすることができました（下の写真）。奥様のフリーデルさんとともにそれはそれはお喜びになり、ここにご紹介するメッセージをW氏からお預かりしました。

親愛なるチェロ奏者の皆様、友人の皆様！
皆様方からの私への幸運を運ぶ鶴とともに回復祈願をいただき大変うれしく思います。

あなた方の思いのお蔭で回復できたことに心からの感謝と御礼を申し上げます。
あなた方すべてのお名前と1,250羽もの折り鶴を松本巧さんは届けてくださり、私の部屋中と私のチェロを見事に彩ってくださっています。
多分、1000人のチェロ・コンサートはもう一度、第5回目としていずれ我々の共通の友人の松本巧さんとともにもたらされるものと思います。
心からの感謝をもう一度皆様に！
ルドルフ・ヴァインスハイマー

編・集・後・記

4月にスズキ・メソードの取材で訪れた被災地に今度はチェロを携えて立つことができました。川崎からの全行程1,200km走破は肉体的には厳しかったですが、それ以上に音楽の持つチカラがエネルギーに変わる場に居合わせることができたことを嬉しく思います。

12月になって、読んで元気になる本が出版されました。『できることをしよう。―ぼくらが震災後に考えたこと』（糸井重里　ほぼ日刊イトイ新聞、新潮社）です。糸井重里さんと彼の主宰するウェブサイト「ほぼ日刊イトイ新聞」の編集者たちが、震災後に手がけた6本の話題作を単行本用に仕立て直し、最後に糸井さんの語り下ろしロングインタビューを収めています。今回の演奏旅行を導かれた高橋明さんのような人たちの物語が凝縮されています。松本巧さんの「私たちは決して忘れません」と各会場でおっしゃった言葉にも相通じる精神が満載されています。ぜひご一読を。1,400円です。

（陸前高田の介護老人保健施設 松原苑でいただいたお話を再録します）

●高田松原を守る会会長様より

「高橋さんたちのグループは、被災された方々に元気になってください、といろいろな活動をなさっています。一本松の図柄があるTシャツを着用されていますが、これを作って販売されて、その益金を私どもに寄付してくださっています。私たちはいただきましたお金で、一本松がわき上がる塩水で枯れないように、ポンプを回すための電気を起こす発電機の燃料代として使わせていただいたり、岩手県が高田松原をこれから何年、何十年かけて復活させるために、私どもでは松苗の畑づくりに力を注いでおりますが、そうした活動にも高橋さんを始め、国際チェロアンサンブル協会の皆様のお志を使わせていただく予定です。本当にありがとうございました」

●介護老人保健施設　松原苑の看護婦長さんより

「この施設は海抜35mの高台に位置していまして、あの日は地震による外壁への損傷もかなりありました。今日、こうして音楽を聴いていただいた利用者の皆さんには他の4ヵ所の施設に約2ヵ月間避難していただきました。その時に、皆さんを誘導したわけですが、ここの入口に津波が押し寄せてきました。今日、レクイエムという曲を聴いて、こみ上げてくるものがあって、あの時の想いが、また甦りました。今日は、15人の皆様による演奏でしたが、本当にこれが1,000人になったら、一体どうなるのだろうと思うと、胸がいっぱいになりました。今日は、涙している方、まるで自分が指揮者になったかのようにタクトを振っている利用者の姿もありました。本当に懐かしい曲から千昌夫の曲まで、私たちに癒しの時間をいただき、感謝を申し上げます。なかなかチェロの演奏を普段、聴く機会がありませんが、このように15人の方々による生の演奏を目の前で聴くことができ、音楽はやっぱり素晴らしいな、癒されるなとあらためて思いました。たくさんのご支援を本当にありがとうございます。ここから見える高田松原海岸の景色は絶景でした。そのことが自慢でした。これから何年かかっても、もう一度復活することを願っていますし、利用者の皆さんには大変な思いをしていただきましたので、今日の皆さんの演奏のように、松原苑は楽しいなと思っていただけるよう、私たちもいろいろな企画を考え、がんばっていきます」